

シモーヌ・ド・ボーヴォワールの『古い』についての考察

——作家の創作をめぐる——

立川信子

20世紀のフランスは個人主義が行き渡った国とみられてきた。現在ではこの西洋型の個人主義がさらに世界中に広がっているように見える。それは個人として自立するのが物理的にむずかしくなる時期、すなわち老齢の問題に関わってくる。特に、食料事情の改善と医療の進歩が加わって長寿が可能になった時代には、人口の高齢化は世界の多くの地域で大きな社会問題となっている。第二次世界大戦後世界を風靡した実存主義は個人の主体性によって世界を変革することをめざした。文学はそのためのよい手段と考えられた。構造主義などによってこの実存主義は思想の流れの焦点から離れて行ったことは一般に言われていることである。実存主義は、女性の社会的活動も促進した。サルトルと並んで実存主義を代表する作家であったシモーヌ・ド・ボーヴォワール（1908－1986年）は、社会的に周辺的存在と見られていた女性の社会的形成の問題を『第二の性』（1949年）で提起して、女性社会的解放の動きを明確にした。同じく、高齢者に関する『古い』（1970年）で、社会的に周辺的存在として老年の問題を提起している¹⁾。「老衰は果して老化の結果であろうか。むしろそれは老人たちをうち棄ててかえりみない社会の人工的産物なのだろうか」（バステード『精神病の社会学』からの引用、592）この著書は広範囲な歴史的

1) Simone de Beauvoir, *La Vieillesse*, Gallimard, 1970；シモーヌ・ド・ボーヴォワール（朝吹三吉訳）『古い』人文書院、1972年

以下同上書のページ数を（ ）で示す。

な事象や文学や政治に関わった個人の老年を取り上げ、老年の社会的状況と個人的な状態を、多くの文芸や政治に関わった人の例を挙げて論じている。まずこの著作にならって、半世紀たった現代における老いについて見方を、文芸の一般に普及している例から見てみよう。従って、一般の人が見る機会の多い美術、最近の映画と幾つかの20世紀の小説を対象とする。次に、問題を全般的に取り扱っているボーヴァワールの評論のうち、作家と老いについて分析する。特に小説を取りあげて、小説という虚構と現実、そして老年の問題を考えてみよう。

1 老い

健康増進、老化を遅らせる方法の本はベストセラーに日本でもフランスでも入っているし、本屋には多く並んでいる。不老長寿は世界共通の関心事である。老いは活動を促進する化学物質の減少で、それを維持するには生活習慣を改善することという内容も似たものがある。vieux (老いた) という言葉は「なじみの」という親愛の意味ももっているのが、現在ではこの言葉を避けて「年配の」*âgé*、「シニア」*senior*、「第三年齢の」*de troisième âge*、「第四年齢の」*de quatrième âge*と呼ばれることが多い。具体的に何才をさしているかは時代や環境によって大きく異なる²⁾。アメリカの求人サイトでは40才以上は中高年と一括されていたりする。だいたい退職年齢を基準にしているがこれもヨーロッパの政府の財政難から65才よりも高齢になる傾向がある。老年に対する価値は歴史と地域によって大きく異なる。これはエマニュエル・トッドの家族の分析に詳しくみることができる。東洋と西洋で大きく異なるということはある。ただし西洋と言ってもイギリスのタイプが一般的というわけではない。カトリックの影響の強い南ヨーロッパでは家族は北ヨーロッパよりも具体的に強い影響力を持っている。それに貧困は家族の共生を促進することが多い。助け

2) 立川信子『フランスと日本の家族の類型化と問題点』地域創成研究年報、第5号、2010年、愛媛大学地域創成研究センター、pp. 87-102.

合って生きることが必要不可欠になるからである。しかし、それも社会的状況によって異なっている。個人主義の側面が文学や映画に描かれることが20世紀の前半多かつたために、フランスは家族を重要な存在と考えるカトリックの国でもあったことが忘れられやすい。又カトリックの影響力が相当なくなった現在においても家族は大きな意味を持っている。ただ親子の依存関係はもともと儒教の影響の強い文化圏に比べれば少ないようにみえる。たとえば、親が成人した子供を援助する程度は低いことが多い。

若さと老いの対照性は活動力の差として、精神と肉体のいずれにも現れる。従って、美と醜さの対立に対応することが多い。よく出される例であるが、童話になっている伝説のなかでは、老女は魔女であることが多い。白雪姫は代表的な例だろう。若さと老いが善と悪に対応している。病、異形の表象はしばしば老いの表象を連想される。この点は西洋と東洋の伝統文化では著しく異なっている。東洋では老年は敬意を持つ対象と長い間みられてきた。長寿は肉体的な衰弱ではなく、より長い期間の修行の積み重ねによる力を表している。たとえば、今日サブカルチャーでは形を変えているが、中国の民間信仰を反映していると言われる『封神演義』で活躍する神仙の多くは長い歳月を生きた老人の姿をしている。又は再生によって年齢を越えている。東洋の絵画の深山にいる老人は神仙に近い尊厳をたたえている。また非理性を感じさせる捨得の絵もよい例である。ボーヴォワールは東洋に関しては殆んど言及していないが、西洋の古い時代に関しては同じことを言っている。

現代に普及しているサブカルチャーでは古い時代の西洋の老年も、東洋の伝統的老年と同じであることが多い。アーサー王伝説に登場する魔法使いマーリンは老人の姿をしていることが少なくない。フランスの人気漫画、ローマ軍を撃退するブルターニュの英雄アステリックスの村の賢者も老人である。映画『ロード・オブ・リング』(2001-2003年)原作J.R.R.トールキン作『指輪物語』(1954-1955年)の賢者ガンダルフもその系列通りの姿をしている。西洋文明の原型となった、ギリシャの古代彫刻においても、アポロンは若者の理想

像を表しているが、大神ゼウスはひげやしわによって中年から老年の特徴を示している。力のある老人のイメージは、世界的に人気のある宮崎駿の『千と千尋の神隠し』（2001年）、『ハウルの動く城』（2004年）にも出現する。後者は、ダイアナ・ウイン・ジョーンズ（イギリス）の『魔法使いハウルと火の悪魔』（1986年）を原作としているが、主人公は老女に変えられた後、魔法がとけても老女のままでの姿を保身につかっている。若さと老いは精神によって転換可能であり、この物語では老いは若者が直面する必要がある社会性を保護する役割をしているのである。

古代文明の再発見の時期とされるルネッサンスの頃に描かれた神話の神々は不死不老であるが、多くの聖母も描かれた。たとえばラファエロ（1483-1520年）の『大公の聖母』（2013年東京、西洋美術館に展示）、若く美しい女性が幼児を抱いて見ている姿は慈愛を象徴している。西洋絵画のテーマとして19世紀まで支配的だったのは聖書と神話と歴史であり、変化する同時代のテーマは多くはなかった。西洋絵画には聖書の『放蕩息子の帰還』のテーマも多く、年配の男性と息子を描いている。キリストの死を嘆く聖母、ピエタは母と息子の姿を数多く作り出した。ミケランジェロの彫刻にも見られるように、まだ老いていない美しい聖母が息子を抱えている。いずれも老年というには遠い。肖像画にはレオナルド・ダ・ビンチの晩年の素描のように風格のある老いを描いているものもある。

西洋において16世紀ルネッサンスから19世紀ロマン主義が出現する以前の時期に異形は否定的に見られているが、ロマン主義がそれまでの異形に対する概念を覆したことはウンベルト・エーコの『醜の歴史』におけるように一般的に言われていることである³⁾。ユーゴーの小説『ノートルダム・ド・パリ』はそれをよく表す作品である。すでにバロックからゴシックに続く異形を対象とする美学が19世紀には文芸の主役として発展してくるのである。20世の前衛芸術が従来の美の概念を否定し、ピカソの絵やデシャンの絵に見られるように

3) ウンベルト・エーコ、『醜の歴史』東洋書林、2009年

端正ではないもの、本来は美的観賞の対照にはならないものに美を発見することになる。ウンベルト・エーコの『美の歴史』には美に不可欠な要素として異形が挙げられているが、怪物のように超自然の存在であって、自然の過程である老年の絵は挙げられていない⁴⁾。『醜の歴史』には老人の絵が幾つかはあるが、むしろ病や異形の絵が多い⁵⁾。同書に挙げられている映画『スターワーズ』（1977-2005年）の異星人のように異形が知性を表すなど評価されている例が現代に近づくほど多くなる。必ずしも年齢と審美的評価は一元的に結びつけられてはいないと言える。ボーヴォワールの評論で、ヴァレリーやジッドの例で挙げられているように老いは当事者の意識によることが少なくない。

ボーヴォワールの『老い』では老人が西ヨーロッパで受けてきた待遇からはじまって、この書が書かれていた当時1970年頃、フランスではまだ数世帯同居の家族がかなりの割合を占めていたが、フランスの老人収容施設の様子も描いている。ボーヴォワールの家族も祖母が高齢になった時、同居を始めている。(549) 親子の同居は以前から考えられていたことだった。長い間老後をすすすことを予想していなかった場所への移動は老人には致命的になるからである。

老人にとって習慣は防衛手段であり、それを放棄しないといけなくと考えるとき、老人は死が自分に向かって突き進んでくると感じる。[従って] 老人が急速に移動させられた場合、[...] 途方にくれ、しばしば絶望する—こうした根を断ち切られた者のうち2人に1人は一年以内に死ぬのである。(553-554)

施設で経済的に余裕のない大部屋の死を待つ人々の描写は生々しい。フランスの報道によると現在では個別の住宅などさまざまなタイプの高齢者用施設が

4) ウンベルト・エーコ、『美の歴史』東洋書林、2005年

5) 同上書、ソクラテス (028) シレノス (029) サチュルス (041) 弁護士 (155) 老女 162, 165, 173

作られている。近くに住む子供の夫婦が毎日介護に行く幾つかの家族が紹介されたりする。高齢者のみの施設に対するイメージは現代でも否定的であることが多い。個人の自由と人間関係の暖かさを重視する生活様式のためであろう。今日、高齢者に関する問題は世界の報道にあふれている⁶⁾。

小説は一般により教養の高い層の娯楽であり、映画の方が一般には娯楽として浸透している。したがって、一般の人々の考えを映画はよく反映していると言えるだろう⁷⁾。映画でも『別離』（イラン、2011年、ベルリン国際映画祭金熊賞受賞）、『愛、アムール』（フランス、2012年、カンヌ映画祭パルム・ドール賞受賞）と介護と家族のあり方を描いた映画が高い評価を得ている。最近のフランスで介護に関わる映画は他にも次の二作を挙げることができる⁸⁾。映画

6) 2013年10月イギリスのサセックス地方のケアハウスOrchid Care centerで入居者5名の死亡に関して薬の過剰投与、間違った医療、不衛生、放置など介護不十分によることを認める判決が下った。(http://www.bbc.co.uk/news/uk-england-sussex-24579496 2013年10月18日閲覧) この施設では2年間に19人の死亡。しかも優良施設に認定していた監督機関の怠慢も指摘された。イギリスの保険省の高齢者の孤独には家族の関わるべきだという発言の後東洋的な家族の介護を見習うべきだろうかとBBC放送は問いかけている。日本は高齢者と家族の同居は3分の2、イタリアでは4割、イギリスでは15パーセントという数年前の統計を引用した。フランスのTV、フランス2では中国について次のように報道している。子供が親を見捨てる例は非常にまれであるが、少子化対策のため一人で両親祖父母を扶養する必要がある、出稼ぎなど遠距離で介護が十分できない場合がある。子供が親を見に行く義務が法律で定められた。親は子供と同居し、同居していない子供も毎日見に来る「幸福な」老人の例を紹介している。東洋と西洋という違いは家族関係に明確に見られるが、生活事情によって従来通りではなくなっている。

7) 映画は今や、映画館やテレビだけでなく、DVDやインターネットで視聴可能数はふえた。しかし、サスペンスやSFなど娯楽の目的のものが少なくない。文学が教材に使われるような文学とサブカルチャーに分かれているように、映画もまた両者に分かれているように見える。映画について研究書も増えてきた。たとえば『文学と映画の間』（2013年）に収録されている野崎敏「新しい『言語』を求めて」、塚本昌則「さすらいの詩学—マルグリット・デュラス監督『トラック』を中心に」はコクトーとヌーヴォー・ロマン作家の映画を論じている。美学の観点からは興味深いが、一般の観客には特異な分野だろう。数多くの新作が出されているフランス映画を日本で知るのは必ずしも簡単ではないが、フランスでも一般の人たちはアメリカのアクション映画やヒット作を見ることが多い。文化のグローバリゼーションは保護政策にも関わらずフランスでも顕著である。ハリイ・ポッターや宮崎駿のアニメはすぐ見られる。現在ではDVDが普及しているが、日本語字幕のあるものはそれほど多くはない。フランス映画で人気の高いのは喜劇的なものであるが、日本で見ることのできる映画は主に名監督トリフォア、ロメール、ゴダールなどの作品、または最新の作品の一部である。世界的にヒットした作品、受賞作品、又はフランス映画という固定観に合わせた映画が選択されていることが多い。

『みんなで一緒に暮らしたら』 *Si on vivait tous ensemble* (2010年) では70代になった2組の夫婦と1人の男性の5人が、心臓発作の後、息子に施設に入れられた友人を連れ出す。認知症の老人が突然部屋に入ってくる施設は健常者の住む所ではないという印象を与える。その友人と一軒家で共同生活を始める。孫を呼ぶため庭にプールを作ったりするが、子供や孫が大勢来るとすっかり疲れてしまってもう十分と言う箇所は、数世代交流も非日常になると持続しないことを予測させる。同居人の一人は病気のため余命が少ない。残される夫のためにという理由も同居の理由である。病気による死、麻痺、認知症と次々と老化によって各人の状態は悪化していくが、長年の友人たちの暖かい友情の中で老いがゆっくりと進行して行く。「家にも車にも保険をかけたけれど、忘れていたものがあつた。晩年よ。」という台詞に長寿社会に直面している人々の戸惑いと模索がよく表れている⁹⁾。

高齢者と同じく介護を必要とする状態として病気や事故後の状態があるが、最近ヒットしたフランス映画『最強の二人』 *Intouchables* (2011年) では身障者の金持ちの男とその介護に雇われた移民出身の貧困家庭の青年との友情と再生の物語である。障害と移民出身という二つの社会的周辺性の出会いである。この話の特色は、現実の要素を二つの対立する特質から分析し、その接点を有利な点として提示していることである。貧困と金持ち、教養と無学歴、身体不自由と健康。フランスの抱える、そして全世界が抱える民族問題に対する楽観的な見方が示されている。第二次世界大戦以後三世代に渡る移民出身の多くは貧困層であり、その存在はフランスでも大きな社会問題である。それがこの映画では好ましい異文化、異なる生活形態として肯定的にむしろ歓迎されている

8) 一見老年を描いたようにみえるアメリカ映画もある。『ハロルドとモード、虹を渡る少年』(1971年) 自殺願望の19歳の青年と人生を楽しんで79歳の女性との交流を描いたアメリカ映画は2008年日本の衛星放送で放映された。困難な時期を生きる若者と自由に生きる老いた女性のこの交流は心温まる物語に見える。しかし、最後にモードの自殺で終わるこの物語は最終的には老いの問題を避けていると言える。

9) 日本でも多くの報道が高齢者問題に関してなされている。たとえば長寿のふたご、金さん銀さんの娘達が兄弟姉妹、家族で暮らしていると認知症が進行しない例が紹介されている (NHKクローズアップ現代)。

る。さらに実話に基づいていると書かれているが、困難な状況にも関わらず片方は生きる意味を発見し、もう一方は生計を立てる方法をみつけるという明るい結末を予想させる。この映画の世界的ヒットの理由はこのような人生に対する肯定的な要素だろう。

2 創作と年齢

個人の自由には自立が必要である。そのため現在の西ヨーロッパでは多くの子供は成人になると親の家を出て、あまり援助を受けない。病気や老い、移民出身という社会的条件は自立をむずかしくする。さらに、その他の条件と異なり老いは進行を緩慢にすることはできても完全に改善することはできない条件である。あるいは改善する必要があると考えること自体が文化的な問題であるということもできるだろう。伝統的な東洋の見方からみればボーヴォワールが盲目のオイディプスの例を挙げて言っているように、老いて失われて行くものによってより明確に見ることができるとか、いわば解脱できると考えることもできるからである。同時に、老いが物理的な衰弱をもたらし、活動を困難にしていく場合は少なくない。ボーヴォワールによると、老いは小説の創作の活動を弱める。その理由は書くことが現実を生きることが困難であるために虚構を作って世界に呼びかけるという現実の困難さと虚構による呼びかけという二つの要求によっているのに対して、老齢によって生きることができると認めることになり現実の困難さという状況を維持しなくなるためということである。

書くという行為は、[...] 一つの同じ衝動によって、想像世界を選び、伝達することを欲する、ということである。[...] 書くという企ては [...] 人間たちが生きている世界への拒否と、人間たちへのある種の呼びかけとのあいだの緊張を含んでいる。作家は人間たちに対立していると同時に彼らとともに在る。これは困難な態度である。それははげしい情熱をもつことを意味し、長いあいだ維持されるには強い精神力を必要とする。(473)

ある種の年取った作家の沈黙には、もう一つ別の理由がある。[...] 彼らには生きることは不可能であるように思われ、袋小路の中で苦悶する。書くことが唯一の脱出口なのだ。彼らは彼らを引きさく対立物の和解をそこに印すために想像界を選ぶ。ところが老年期においては彼らはこの和解を実現してしまっているのである。[...] それによって人生が可能であることを立証して。年取った人間にもっとも適さない文学のジャンルは小説である。この領域にも例外はある。[...] 全体としては、年取った作家は小説よりも詩や評論に向かう。(476)

しかも、書くことは作家の内面の深層にある思考から取り出されてくるために、いつも同じものに基づくことになり、要するに長い間書くと同じことを繰り返すというのである。

仮構の世界が生命と色彩をもつには、それがひじょうに古い幻像に根ざさなくてはならない。現実の出来事や時事問題は小説家に支点や出発点を提供することはある。しかし彼はそれを乗り越えねばならず、この乗り越えをみごとに成就するには自己のもっとも深奥の部分から力を汲まなくてはならない。しかしそのとき彼が見いだすのは同じ主題、同じ固定観念であり、彼は以前に言ったことをくりかえす危険がある。[...]

年取った作家の唯一の可能性は出発点において彼のいただいた投企がじつに堅固に根をおろしたものであったため彼が最後まで獨創性を保ちつづける場合である。(478)

著者はヴォルテールとユーゴーを例外として挙げているが、挙げている例は論全体に偏っている。後世に残る小説家が死に至る日まで創作をしている例は他にも挙げることができる。例を殆んど挙げていないスタンダール (1783

-1842年)は小説『ラミエル』を死ぬ間際まで書き続けていた。バルザック(1899-1850年)の『人間喜劇』は作者の病死によって中絶している。ゾラ(1840-1902年)は事故死のため例外としても最後の小説は未完に終わった。ルイ・アラゴン(1897-1982年)は常に詩と小説を書いて85才でなお遺作がある。小説家が小説を書かなくなるのはむしろ文学観の変化というべきだろう。

ポーヴォワールは作家の虚構の創作が晩年衰えるように見えるのに対して、画家の創作が晩年にも傑作を生み出す理由を絵画の技術の習得の難しさ、画家が名声を得ている方が自由に創作できることに加えて、画家の描く対象が日々異なっていることを挙げている。

画家たちは科学者よりも過去の重圧や未来の短さによって邪魔されることが少ない。彼らの業績は複数の絵から成りたつが、そのたびに素白のキャンヴァスの前に立つのだ。彼らの仕事は新たな始まりの連続なのである。それには絵は科学理論の形成ほどの時間を要求しない。彼らが一つの絵に着手するとき、それを完成することが彼らにはほぼ確実なのだ。作家と比較した場合、彼らは大きな幸福に恵まれている、すなわち彼らは彼ら自身の実質で、自分を養うのではないということだ。彼らは過去の延長のなかにはなく、現在に生きるのである。世界は彼らに無尽蔵に、色彩、光、光沢、形態などを提供する。もちろん、彼らの作品以外のものはけっしてつくり、しかし彼らの仕事は無限に開かれた状態にあるのだ。あらゆる創造者は、その生涯の終わりに近づいたとき、世論に対していっそう大胆になり、自信もいっそう深まる。[...] 人に気に入られるか気に入られないかを心配せずに、自分の規範だけに則って制作することは彼にとって大きな利点となる。ただ、作家の場合はしばしばもはや何も言うべきことがないので、この自由を活用することが少ないが、画家はつねに描くべきものがあり、それなくして天才が存在しえないこの至上の自由を享受することができる。(480)

しかし、これは矛盾した説明のように思える。画家の描く対象が日々異なっているとしたら、作家の描く対象も日々異なっている。作家を取り巻く世界は変転していくし、作家の内面も変化していくはずである。

3 ジッドの創作と古い

ボヴォワールは、長寿であったにも関わらず、書く気力を失い、同じ考えを繰り返し書いた作家としてアンドレ・ジッド（1868-1951年）の日記から多くの引用をしている。ヨーロッパの第二次世界大戦中という悲惨な状況にあってジッドも各地を移動をしているが、個人的には資産と名声（1945年ノーベル賞受賞など）に恵まれ、経済的にも人間関係にも恵まれた老年であったと言える。確かに病や無気力を繰り返し嘆いて日記に記載している。（1949年、547）しかし、これは必ずしも老年だけではない。また、ジッドは自己というものをもともと一定したものと考えていない。さらに、雑誌編集に関係した批評家であるからエッセーとして批評として日記は出版されていた。日記は小説を書いている時から創作の一部であったというべきだろう。ジッドの場合『贖金使い』（1925年）以降小説の創作が減る理由はむしろ次の二つであると考えられる。一つは『コンゴ紀行』（1927年）によるフランスの植民地批判や『ソビエトからの帰還』（1936年）『ソビエトからの帰還訂正』（1937年）の共産主義国の独裁体制批判など、社会活動のためである。作家が社会的影響力を持つときこれは当然創作活動に加わってくる。

そして、もう一つの大きな要因は、虚構を構成するよりもいわば現実をそのまま提示することに興味を持ったためではないかと推測できる。『贖金使い』の二人の主要な作中人物を対比してみれば、それを読み取ることができる¹⁰⁾。一人はこの作品をつなぎ合わせる役割をしている小説家エドワールである。もう一人は小説の冒頭で家出をして、エドワールの秘書になる少年ベルナルである。エドワールは現実を十分には把握できない。老師に頼まれて孫をさがし、

10) André Gide, *Romans et récits, œuvres lyriques et dramatiques II*, Gallimard, bibliothèque de la Pléiade, 2009 『贖金使い』をFMと略す。

寄宿舎に入れるが、それが少年の自殺を招くことになる。エドワールはいわば現実の脇を通して、本質をつかむことができない。ベルナールはジャーナリストになりたいという目的を見つけて、育ての親のもとにもどる。すなわち、虚構を創作しないで事実をそのまま提示しようとすることを選ぶわけである。それは小説の中でエドワールが書こうとしている小説の話をする部分で、観念から小説を作ろうとしているエドワールを、ベルナールが事実から始めるべきだと批判していることからわかる¹¹⁾。エドワールが書きたいと思っている小説は「純粹小説」である。これは「ギリシャ悲劇のように、輪郭が不明確な」、「不純な要素を小説の中から排除した小説」とエドワールが説明している。

小説に特には属さない要素を小説から取り除くこと、写真が絵画から正確さという配慮を取り除いたのと同じく。写真のためにたぶん明日には現実主義が盛んにした対話は小説から一掃されるだろう。外的で出来事、事件、心的外傷は映画に属している。小説はそれらを映画に任せる方がよい。人物描写でさえ、小説固有には私には見えない。純粹小説はそれらとは関わりがない。[...] 小説家は普段読者の想像力を十分信用していない。(第1部8章FM227-228)

小説とはもっとも自由な法則のないものだからではないかな。そうだからこそ、たぶんその自由への恐れのためにこそ小説がいつも現実にこだわるのではないか。(自由を渴望する芸術家はしばしばそれを手に入れたとたんにおかしくなるから) フランスの小説についてだけではない。[...] 小説の唯一の進歩は自然らしくに近寄ることだ。小説はニーチェのいう「輪郭のすばらしい腐食」、生からの意図的な離反と無関係である。そのためにたとえばギリシャ演劇作品や17世紀悲劇にスタイルができるのだ。(第2部3章、FM311)

11) P. Masson et J.-M. Wittmann, *Le roman somme d'André Gide. Les Faux-Monnayeurs*, Presses Universitaires de France, coll. CNED, 2012.

純粹という概念は当時論じられていた純粹詩やヴァレリーの思想に影響されたものである。また、ジッドの美学の中で形成されていった古典主義の重要な特徴でもある。ジッドの小説の多くがレシと名付けられた短編小説であることから、この理念はジッドの創作に適合しやすいものであった。しかし、『法王庁の抜け穴』（1914年）で短編小説の単線型から複線型長編小説、ロマンと名付けられた小説の創作に移行しようとして時に創作された作品が『贖金使い』である。その小説の中で追求されたものが、純粹小説であるということは論理的な行き詰まりを予測させる。小説はジッドが言っているように本来純粹でない要素を総合することによって形成されてきたと見た方がよいからである。また、写真の出現が絵画に影響したように、1930年代以降の映画の発展も文学に影響もあることはジッドの指摘通りである。つまり、ジッドはそれまでの創作の中心であった虚構の創作の限界をこの作品のなかで描いていると考えることができる。現実には各人の主観によってとらえどころのないものであり、解釈の可能性は多様である。その無限の可能性の提示をしてもとらえどころはないままであり、現実を変革するのに多く寄与するように思えなくなる。その時、現実と作者が考えるものを転置しえるような虚構世界を作ることに興味を持たなくなるのかもしれない。また、虚構を通さないで現実を提示したいという傾向はすでにジッドの初期作品、『重罪裁判所の記録』（1913-1914年）から、『ポワチエの幽閉者』（1930年）、『雑報記事』（1930年）など晩年まで続いている。

しかし、小説や映画は、現実の断片を見るだけでは把握できないものを一般の読者に提示しえる有効な手段であることに変わりはない。過酷な現実、スラムや紛争地の問題も、ドキュメンタリーだけではなく、虚構に仮託されることによって強い伝達力を持つてくる。*City of God*（ブラジル、Paulo Linsの小説、1997年、映画、2002年）や『灼熱の魂』*Incendies*（火事）（カナダ、レバノンからのケベックへの移民ワジディ・ムアワッドの戯曲『焼け焦げるたましい』2003年、映画、2010年）のように小説や戯曲から映画化された作品が高く評価されることに虚構の力をみることができるだろう。後者にはギリシャ悲劇の影

響が大きいように見える。虚構になると虚構の伝統とも言うべきものが現れる。考える時のモデルとか原型と言ってもよいかもしれない。こういうものは虚構を作るには役に立つが、現実がひとつの虚構であるということを考えてとしても、現実を歪曲し正確な伝達を阻害するのではないだろうか。虚構を現実との関連からのみ考える時、そこに虚構の限界を見ることもありうるかもしれない。

ジッドの作品全体について言うならば、若者と成人の対比はかなり初期からみることができる。作中人物は後で挙げるギリシャ神話の人物を除けば、ほとんど若者から中年までである。父を少年の時に母を青年時代になくし人生半ばで主要な小説を書いていることから考えると老人があまり出てこないのは不思議ではない。『田園交響楽』（1919年）では父と息子の対立という中年と若者の対立が描かれている。その中で例外的なのが、『贖金使い』のエドワールの元教師ラペルーズ老人である。子供と音信不通になっていた老人が見つけてもらった孫のボリスに初めて会った時二人の間には親近感が生じない。「私が銃で自殺するのをやめたのは音に対する恐れの子供のせいなのです。[...]それが恐ろしかったのです。眠り込むかわりに突然目覚めるのが怖かったのです。」（第3部3章FM358-359）孫の近くで暮らし始めて以降、老人は奇妙な音bruitに悩まされていると言っている。

「何か邪魔するものがあるのです。[...] ベッドのそばで壁にまさに頭の高さで何か音がするのです。」[...] 年齢による悲しい退化はラペルーズには知性ではなく性格の深いところで生じていた。[...] 私はそこ（子供のような絶望）から引き出すためにボリスの話をした。（第3部15章、FM439-440）

もともと精神的な問題を抱えていた孫のボリスは、老人がいる学校の寄宿舎に入った後自殺をする。その後、その音が老人に聞こえなくなる。

「あれ〔音〕が止まったのですよ。もうきこえないのです。〔…〕
私は静寂沈黙がとても必要なのです。〔…〕しかし生きている間
私たちに聞こえないものがあるのです。調和…音が調和を覆って
しまっているのです。死後しか本当には聞こえないでしょう。〔…〕
魂の不滅性、〔…〕私も信じてはいません。〔…〕この世界では神は
いつも黙っていることに気がつきましたか。話しているのは悪魔だ
けです。または少なくともどんなに注意しても私たちは悪魔しか聞
こえないのです。神の声を聞く耳を持たないのです。神の言葉、そ
れがどんなものか時々自問しませんか。人間の言葉にあるものものこ
とはありません。〔…〕神の言葉は創造そのものだと私はよく思
いました。しかし、悪魔がそれを奪ったのです。その音は神の声を
今はおおっています。それでもなお最後のことばは神のものだと思
いませんか。そして死後時が存在しなくなるならば、すぐに永遠に
入るとしたら、神の声を…直接に聞くことができますか。〕
〔…〕

「いやいや、〔…〕悪魔とよき神は一つの者だ。〔…〕」
私〔エドワール〕にボリスについて一言も言わなかった。しかし、
私はこの神秘的な絶望は老人の苦しみの間接的な表れだと思わな
くではならなかった。(第3部18章、FM465-466)

この部分はジッドの自伝『一粒の麦もし死なずば……』(1920年)の中に描
かれている作者自身がいじめにあっていた頃の虚弱な少年時代と音楽教師を
変形して使っていることは推測される。老人の方からみたこの物語は、老人が
それと気づかずに恐れていたことが起きてしまって、孫を気づかう気がかりが
なくなったということを意味しているのだろうか。神の沈黙という言葉をラ
ペルーズ老人が言っていることから考えると、孫を失うという老人のショック
が決定的に大きかったとエドワールのように考えることになるだろう。この老
人と子供という関係が円滑には機能しなかったように、長い間音信のなかった

老人と孫という人間関係も十分には機能しなかった。それが老人の耳に異様な音が響いていた理由のひとつと考えられる。ジッドにおける魔物démonというのは多面的な存在である。ジッドはフロイトを評価しなかったが、内面にある「他者の意識」を魔物という存在で表していたと解釈されている。それが悪の方へ傾くとき悪魔diableとなるのである。ジッドは熱心なプロテスタントの信仰から少しずつ離れて行った。共産主義に救いを見いだしていた時期もあるが、これもソビエトの実情に接してすぐに消える。信仰を失った者の地獄とこの小説を評する者がいたのもそのためである。

この小説は幾つものテーマをもっているが、高校生の少年の家族の物語である¹²⁾。バルナールは自分が実子でないことを知って家出をするところから小説は始まり、離婚した養父のもとにもどることによって終わる。血縁の家族の崩壊と血縁によらない人間関係の再編による家族の再編成である。この変化を肯定的に見ることもできる。この小説が救いのない世界を描いているかどうかは解釈によるが、この家族のあり方は、ある意味で現代のフランスの家族を予告している。離婚の増加による家族の解体、婚姻ではなく同棲による夫婦の形成、同性結婚の合法化、再婚による合成家族、養子による家族の形成など。

『贖金使い』以降にジッドが書いた小説は三部作、『女の学校』（1929年）『ロベール』（1930年）『ジュヌヴィエーヴ』（1936年）と『テセウス』（1946年）である。前者の三部作はある家族の歴史を母、父、娘と異なる視点で語る物語で、ある意味で小説を解体した小説ともいえる。ジッドの戯曲『オイディプス』（1931年）では王として自分の人生の真実を発見する時点を取りあげている。神官テレンシアスに対立して、オイディプスは個人の自由な選択を重んじる。最後の小説『テセウス』はジッドの人生をギリシャ神話の英雄に仮託して語って自伝的であると言われているが、世俗の世界を肯定する老年のテセウスに対して、老年の盲目のオイディプスは信仰の世界に属している。二人の老年の英雄は、盲目のオイディプスが威厳ある老年を表すという時のボーヴォワ

12) *Dictionnaire Gide*, sous la direction de Pierre Masson et Jean-Micyel Wittmann, Classiques Garnier, 2011.

ルの表象に近いだろう。

最後に『贖金使い』を小説の黄金時代19世紀から20世紀の流れの中に置き直して見てみよう。19世紀の小説では家族は大きな役割を果たしている。家族は構成員を保護し助け、対立し抑圧する。19世紀末、ゾラの小説は家族の崩壊と再生をしばしば描いている。20世紀前半には家族が個人を抑圧する側面がより強く描かれるようになる。ジッドと親交のあったマルタン・デュ・ガールの『チボー家の人々』（1922-1940年）は、1937年ノーベル賞受賞と反戦の思想のためか戦後の日本ではよく読まれた小説であるが、父権の強い家庭の2人の息子の人生を追っている。20世紀後半、第二次世界大戦後になると、このような大河小説は姿を消して、個人と社会の関係がまるで切れてしまったかのような不確かな人間関係が描かれることが増える。アルベール・カミュ（1913-1960年）の『異邦人』（1942年）はその代表的な例である。しかし、カミュの遺稿となった『最初の人間』（1994年）には、早くになくなった父に代わって家族を支配した祖母、そして母、叔父と主人公の作家の緊密な関係が描かれている。『異邦人』は虚構性の高い小説である。フランスの小説で世界的に話題になったものを挙げるならば、ノーベル賞を受賞したル・クレジオの小説『ダビッド』や『モンド』（1978年）には子供と消えた家族や家族ではないが取り巻く人々が描かれている。子供と老人は社会的な周辺性という近似性による親密さを持っていると言えるかもしれない。

ボーヴォワールの評論はヨーロッパの歴史全体を視野にいれ、当時の老人の実態も調査し、フランスではよく知られた演劇、たとえばモリエールの喜劇に登場する愚かな老人など型にはまったステレオタイプなど多くの例を挙げて分析している。しかし、作家、特にジッドの創作と老年の関係は、老年を衰退と見る見方に論を統一するためか、かなり偏っていると言うことができるだろう。ジッドの小説創作の終焉は老年のためというよりは美学の発展の結果という方が大きいと思われる。さらに、老年の問題は個人の活動の問題を越えて、年金や社会保障のような制度的な事柄から孤独のような精神的な問題まで多く

の困難な問題を抱えている。新たな研究がなされつつあり、また多くの研究を必要としている。ボーヴォワールは長い評論の結論として実存主義らしい積極的な、生涯学習のパンフレットに適しそうな解決策を提案している。

老いがそれまでのわれわれの人生のパロディーでないようにするには、ただ一つの方法しかない、それはわれわれの人生に意義をあたえるような目的を追求しつづけることである。[...] もし教養が一度覚えたらそれっきりでやがて忘れられてしまうような無力な知識ではなく、実践的で生きた教養であるならば、その教養によって個人が自己の環境への把握の手段をもち、この把握をつうじて行う活動が年月の推移のあいだに成就し更新されてゆくならば、彼はあらゆる年齢において活動的で有用な市民でありつづけるだろう。彼がはやくも子供のころから一個の微粒子として他の多くの微粒子たちとともに孤立した自閉的な存在にさせられることなく、彼自身の生活と同じように日毎のそして本質的な一つの協同生活に参加するのであるならば、彼はけっして流謫の境涯を経験することはないだろう。(637)

具体的に考えていたモデルはサルトルと同じく著者の時代の影を色濃く残している。「しかしいかなる国においても、いかなる時代においてもこのような条件が実現されたことはない。社会主義諸国は資本主義諸国よりも少しはそれに近づいているとしても、それはまだほど遠い。」(640) 現代には、確かな解決策の模索がなされる必要があるだろう。